4. 太々神楽（だいだいかぐら）にみる歴史的風致

(1) はじめに

神楽とは、神の座を設けて神々を勧請（かんじょう）し、その前で奉納される芸能である。神楽には多様な種類があるが、このうち太々神楽は、栃木県下にもっとも多く分布している民俗芸能の一つである。

太々神楽の内容は、主に『古事記』や『日本書紀』をモチーフとした無言の神話劇ともいうべきもので、元々は神職中心で行われていた。後に、神楽師と称する氏子の手に委ねられるようになったところが多く、これを代神楽と言い、後に太々神楽と呼ばれるようになったといわれている。江戸時代から続くものは県内でもさほど分布しておらず、その多くは明治時代から始まったと考えられている。

本市では、石橋地区の下古山星宮神社と橋本神社において、氏子による太々神楽が継承されており、現在も祭礼時に奉納されている。

下古山星宮神社の太々神楽

橋本神社の太々神楽

4-1. 下古山星宮神社の太々神楽

1） 下古山星宮神社の環境

下古山星宮神社が所在する石橋地区は、北から南へわずかに傾斜する平坦な土地で、高山・原野などはなく、西部に姿川が南流している。東部は国道４号線とＪＲ東北本線・東北新幹線が並行して通り、西側一帯には市街地が展開し、国道 325 号が壬生方面へ分岐する交通の要所である。

下古山は、姿（すがた）川東岸の台地上に位置し、東部を日光街道が通り、街道沿いを通古山（とおりこやま）と称する。

下古山星宮神社の環境

2） 下古山星宮神社

下古山星宮神社の沿革等については第２章第３節第４項で述べたとおりである。太々神楽に関する建物として、神楽が奉納される舞台となる神楽殿は、境内の入り口にある一の鳥居と一の鳥居から 20m先にある二の鳥居を進んだ真正面に見える拝殿の西側に位置する。明治 45 年（1912）の『姿村郷土誌』によると、明治 29 年（1896）に建立されたとされ、南を正面とする桁行３間・梁間２間の入母屋造桟瓦葺の建物で、南と東面に縁がまわる。後の改築であると思われるが西側に楽屋部分が付属する。なお前述したが、拝殿正面の柱に取り付けられた板札によると、昭和 51 年（1976） ４月に神楽殿の屋根も葺き替えられた。なお、神楽殿の正面には平成 14 年（2002）に面と衣装を修復した際に奉納した額が掲げられている。

拝殿の注連縄はヘビしめ縄と呼ばれ、ヘビの形をした特徴的なものである。ヘビは水神様の使い、あるいは金運の象徴として、また、脱皮を繰り返すことから再生と結び付けられ不死の生き物と信じられていた。下古山星宮神社の御神徳は、天からの恵みを与えるとともに、人々を祓い清めて新たな活力をあたえる力を有しているとされることから、象徴的にこのような珍しい形が生まれてきたと考えられている。

神楽が奉納される祭礼時には、神楽殿の南面と東面がすべて解放され、地面から縁までを紅白幕で覆い、軒には幔幕を吊るし、内部には棚が設けられ、御幣や供物などがしつらえられる。

下古山星宮神社一の鳥居

下古山星宮神社二の鳥居

下古山星宮神社神楽殿

下古山星宮神社神楽殿額

3）下古山星宮神社太々神楽

①　太々神楽の奉納と演目

神楽面

下古山星宮神社では、年間を通して祭礼が行われているが、太々神楽が奉納されるのは、４月の春季例大祭と１月の元旦祭である。

下古山星宮神社太々神楽は吉田流太々神楽であり、起源は定かではないが、神楽に使用する鼓（つづみ）の胴の内側の墨書に明治期の年号が記されていることから、その頃には既に行われていたことがわかる。昭和 50 年（1975）に石橋町（当時）の無形の民俗文化財に指定され、平成 18 年（2006）の合併に伴い、現在は市指定の文化財となっている。

神楽の舞に欠かせない神楽面は、15 面が現存している。このうち、現在上演されている 13 座のなかで使用しない面が２面あることから、昔は 13 座に加えて他の舞も奉納していたと考えられている。

下古山星宮神社における祭礼一覧

実施時期	名称	概要
1 月 1 日	元旦祭	宮司による祝詞の奉納及び神楽の奉納が行われる。神楽は、下古山太々神楽保存会にて行う。演目は春季例大祭とは異なり、神楽を奉納する人々による福まきも行われる。
2 月 17 日	祈年祭	1年の農作業を無事に行うことを祈る祭礼。新嘗祭と対になっている祭礼であり、宮司による祝詞の奉納等を行う。
4 月 10 日	春季例大祭	創建日に行う神様の御扉を開ける重要な祭礼。宮司による祝詞の奉納、太々神楽の奉納、厄除祈願等を行う。神楽の主催は厄年の人が担い、様々な準備を行う。
7 月中旬	八坂祭	疫病退散を願って行われる祭礼。宮司による祝詞の奉納等が終わった後、大人神輿と子供神輿による神輿渡御を行う。現在は、住宅密集地を巡行しているが、かつては下古山全体を分担して練り歩き、各戸の中まで入っていた。
8 月下旬の日曜日	風祭	農作物を風害から守るための行事。立春から数えて 210 日に台風が多いことから、この日を荒日（あれび）と称し、稲を守るために嵐除けの祈願をする。以前はお日待ち（ある決まった日の夕刻より一夜を明かし、翌朝の日の出を拝して解散する行事）を行っていた。現在は、子どもたちが神社周辺を「せんどう、まんどう」と声をかけながら周る。
11 月 15 日	秋季例祭	内容は春季例祭とほぼ同じであるが、太々神楽の奉納は行われない。
11 月 25 日	新嘗祭	新穀に感謝する祭礼。祈年祭同様、宮司による祝詞の奉納及び神楽の奉納が行われる。以前は、この日から新米を食べるという習慣があった。

春季例大祭

例祭は、神社の祭礼のなかでも重要な祭礼であり、下古山星宮神社では、春季例大祭の際に太々神楽の奉納が行われる。下古山星宮神社太々神楽の演目は 13 座あり、祭りによってその演目が異なるが、春季例大祭では 13 座すべての演目を舞う。春季例大祭は、神社の創建日である４月 10 日に行われていたが、現在は、地域住民が参加しやすいように４月 10 日前後の日曜日に開催されている。

神楽を舞うのは下古山星宮神社太々神楽保存会のメンバーであるが、主催者は厄年の男女（女性 33 歳、男性 42 歳）と決まっている。地元の 42 歳の厄年の男性が厄除け祈願者を集め、神様への奉納品などをまかなうとともに、神楽の準備や後片付けを行う。

４月の例大祭に向けて、通常は約１か月前から社務所にて神楽の練習が開始される。また、本番までに、神楽殿の装飾や餅の袋詰めなどの準備も行われる。

祭礼は、10 時より本殿で始まり、まず初めに宮司による祝詞の奉納等が行われる。祈願等の終了後は、直会（なおらい）が行われ、12 時から 15 時頃まで太々神楽を舞う。そして第８座と第９座の間に、厄年の男女が社殿に集まり 30 分程厄除け祈願を行う。全ての演目が舞い終わると、厄年の男女による福まきが始まる。福まき終了後、厄年の男女、神社総代、神楽の舞手による直会が行われ、例大祭が終了する。

元旦祭

元旦祭では、下古山星宮神社太々神楽保存会により新春特別太々神楽が奉納される。

元旦祭は１月１日 10 時半より始まり、本殿で元旦祈祷が行われる。神楽は祈祷と同時に神楽殿にて始められ、12 時に終了する。４月の春季例大祭時よりも演じられる時間が短く、13 座のうち９座が舞われる。第１座、第７座、第８座は必ず演じられ、それ以外の６座はその年によって異なる。神楽の奉納後には、餅や福銭が撒かれる福まきや、くじ引きが行われる。なお、祈祷は希望者がいる間は神楽が終了した後も行われる。神楽の舞手は演目終了後、直会を行う。

釣り竿の縄を編む様子

春季例大祭における午前中の神事

午後の厄除けの神事に向かう人々

福まき

下古山星宮神社太々神楽の演目一覧

座	演目	概要	写真
第一座	奉幣（ほうへい）の舞	神主が神霊出現の媒体となる依代（幣）を捧げ持ち、神殿に進む。祝詞をあげ、幣は舞手に渡される。舞手は左手に幣、右手に鈴を持ち、舞を奉納する。	
第二座	猿田彦（さるたひこ）の舞	道案内の神である猿田彦が岩戸開きに先立って舞う。この神の面は赤く高い鼻で、頭に錦金襴（にしききんらん）の鳥兜（とりかぶと）をいただき、右手に矛を持ち、四方に睨みをきかせ魔を払いつつ国開きの道案内を舞う。	
第三座	住吉（すみよし）の舞	御田植神事（おたうえしんじ）を表現する舞である。オキナ（翁）を連想させる神の舞で、舞手は榊と鈴を持って腰を曲げてゆっくりと舞う。	
第四座	春日（かすが）の舞	刀を持ち、四方を睨み邪悪を断ち切る勇壮な舞である。	

座	演目	概要	写真
第五座	引射(ひきしゃ)の舞	舞手は2人で、弓矢を持ち、鬼門を射し魔の侵入を断つ舞である。	平成 30 年度上演なし
第六座	宇津女(うづめ)の舞	天照大神が天の岩戸に籠った時、その前で舞を舞った神で、紅白の衣で女装し、左手に扇子、右手に鈴を持って舞う、雅で華やかな舞である。	平成5年(1993)
第七座	手力男(たぢからお)の舞	天の岩戸を押し開き、天照大神に出てもらうことを願った力持ちの神の舞で、岩戸を開けるしぐさをする。左手に榊、右手に鈴を持ち、勇壮に舞い、霊魂(たまふり)を高める。	
第八座	大神(おおかみ)の舞	左手に鏡をつけた榊、右手に鈴を持って舞う優美な舞である。	
第九座	八幡(やはた)の舞	武勇の神として、左手に弓を持つ勇壮な舞である。31 文字の呪文「この竹は高天が原に生いし竹、やぎはぎなして八幡なりけり」と大声で唱え魑魅魍魎(ちみもうりょう)(色々な化物)を制圧する舞である。	
第十座	白狐(びやっこ)の舞	五穀の稲魂を祀った稲荷の使者である狐が豊作を祈願して舞う。鍬切(くわきり)、種子まきをする。ヒョットコに指導しながら、土を踏み発芽を促す。白狐とヒョットコのユーモラスな舞である。	

座	演目	概要	写真
第十一座	恵比寿（えびす）の舞	七福神の恵比須が右手に釣り竿、左手に扇子を持ちながら舞う。その後、紅白の餅を付けた釣り糸を観客に下げる。金銭を包んだ「手びねり（料）」を餅と交換して釣り糸に付ける観客もいる。しばらくすると、ヒョットコが１人右手に釣り竿を持って登場し、恵比須と一緒に観客に向けて釣り糸を下げる。後半、恵比須が鯛を釣り上げると、ヒョットコは退場し、再び恵比須が右手に釣り上げた鯛、左手に鈴を持ち、華麗に舞う。	
第十二座	大国（だいこく）の舞	七福神のひとりで、頭巾袋を左肩に負い、打出の小槌を持ち、米俵に鎮座する。福の招来を祈る。	
第十三座	鬼神（きしん）の舞	悪事の一切を司る神である鬼神と須佐之男命による舞である。はじめに鬼神が登場し、舞台上を我が物顔で舞踊る。そこへ須佐之男命が登場し、手にした剣を鬼神に向け呪文を唱え、退治する。最後は勇壮な須佐之男の舞で終わる。	

4）　下古山星宮神社太々神楽保存会

下古山星宮神社太々神楽保存会は、昭和 29 年（1954）に結成された。現在は、下古山に居住する 60 歳～70 歳の 11 名が所属しているが、舞と演奏の技術を両方持つ者は３名のみであるため、舞手が多い演目は実施が困難な状況にある。保存会に所属しているメンバーは、神社の神輿製作のために資金集めなどを行った拾壱会（といちかい）を兼ねている人が多い。

神楽の練習は、かつては週に１度行っていたが、現在は祭りの約１か月前から始めている。

下古山星宮神社の太々神楽にみる歴史的風致の分布

4-2. 橋本神社の太々神楽

1） 橋本神社の環境

橋本は、下古山と同じく石橋地区の南部に所在し、南側は国分寺地区の箕輪地域と接している。姿川の西側の台地上に集落が広がっており、江戸時代には壬生藩領であったことから干瓢の生産が古くから行われてきた農村地域である。

橋本神社の環境

2） 橋本神社

① 歴史

橋本の南部、姿川西岸の台地に形成された集落の東端に立地する橋本神社は、明治 35 年（1902）９月の大暴風雨で橋本にあった神社の社殿や立木が倒壊したため、翌年３月 16 日天満宮神社をはじめとする計 11 社を合祀し、明治 38 年（1905）に社名を橋本神社と改称したのが始まりである。

主祭神は天照皇大神（あまてらすすめおおかみ）、配神は須佐之男命（すさのおのみこと）・武御名方命（たけみなかたのみこと）・稲倉魂命（うかのみたまのみこと）・大山祇命（おおやまつみのみこと）・火産霊命（ほむすびのみこと）・大雷神（おおいかつちのかみ）・猿田彦命（さるたひこのみこと）・菅原道真霊の８神で、いずれも合祀前の各社の祭神である。

② 建造物

神社は県道下野壬生線の北側に南面しており、境内には古墳を含み、墳丘の頂部に石碑などが設けられている。道路に面して数段の石段を登ったところに設けられた昭和 61 年（1986）11 月 15 日の銘のある一の鳥居、その奥の寛政２年（1790）の銘のある二の鳥居を経て、参道の左手に柱を大谷石とした手水舎、正面に拝殿と本殿が配される。神楽殿は拝殿の東側に、神楽殿の背後には境内社の石祠が並ぶ。

本殿は、棟持柱（むなもちばしら）で支えた屋根に千木（ちぎ）と鰹木（かつおぎ）をのせる神明造で、屋根は亜鉛鉄板葺とする。鉄骨造亜鉛鉄板葺の建物に覆われ、建物の状態は良い。拝殿は桁行３間・梁間２間の入母屋造平入亜鉛鉄板葺で、組物や彫刻といった装飾はほとんどみられない簡素な建物である。本殿および拝殿の詳細な建築年代は不明であるが、『栃木県神社誌』（昭和 38 年（1963）刊）における当該社殿の形式等の記載内容が現存建物と一致することから、少なくとも昭和 38 年（1963）以前の建築と考えられる。

太々神楽が奉納される神楽殿は、拝殿の東側、拝殿よりも少し西に軸を振って配されている。地面から舞台の高さまではコンクリート製の壁で構築されており、それより上部は木造で四隅の柱と背面に板壁を設け、切妻造波型鉄板葺の屋根を支える。舞台となる部分は桁行 5.6m、梁行 3.7mで、その背面に幅 1.7mほどの階段と踊り場が付属する。なお、神楽が奉納される際には、前面と側面の軒下に赤い幔幕が吊られ、奥の壁には棚が設置されて御幣や幔幕、供物などがしつらえられる。

橋本神社拝殿

橋本神社本殿

橋本神社神楽殿

橋本神社境内社群

3）　橋本神社太々神楽

①　太々神楽の奉納と演目

橋本神社では、大正元年（1912）から２年（1913）にかけて、神社創立 10 周年記念事業について協議され、それまで鷲宮神社の秋の大祭に奉納されてきた太々神楽衣装一式を新調することが決定し、氏子一同により面・衣装一式とともに、太々神楽自体も鷲宮神社から橋本神社へと移管され、橋本神社太々神楽とすることとなった。そして大正２年（1913）11 月に鷲宮神社の秋の大祭で橋本神社太々神楽としての舞い初めが行われた。

鷲宮神社の燈籠

この太々神楽は鷲宮神社境内にある石燈籠に「奉納代々神楽譜中　文化二乙丑年（1805）８月吉日」と刻銘されていることから、すでに江戸時代後期から上演されていたことがわかる。

平成６年（1994）度には、衣装・面の修理、新調を行った。なお、神楽面には面裏側に大正元年の年号のあるものがいくつか残っている。そして昭和 50 年（1975）４月１日付けで石橋町の無形の民俗文化財に指定され、平成 18 年（2006）１月 10 日の合併に伴い市指定の文化財となっている。

現在は、春の祈年祭で太々神楽を奉納しており、演目は奉幣（ほうへい）序の舞を含めて 13 演目が現存しているが、奉幣序の舞を除いて十二座神楽と呼ばれている。橋本神楽太々神楽保存会によって継承されて

おり、春の祈年祭に向けて２月頃から練習が開始される。練習は橋本神社の神楽殿で行われていたが、平成 16 年（2004）に橋本公民館が建設され、それ以降は公民館が練習場所となっている。なお、祭りの準備は、橋本の下坪・中坪・山中坪・上坪の集落が毎年持ち回りで当番をしている。

橋本神社太々神楽の演目一覧

座	演目	概要	写真
第一座	奉幣序の舞	宮司によってのみ行われるもので、本殿で神事を終えた後に神楽殿に移り、文字通り「幣」を奉納する舞である。右手に鈴、左手に幣（榊）を持つ。ここでの幣を含め、舞の際に手にするものはすべて依代（よりしろ）と言われ、神の霊が宿るところとされる。鈴は七五三鈴とも呼ばれる一般的な神楽鈴である。	
第二座	猿田彦（さるたひこ）の舞	猿田彦命は国土を治める神の一人とされ、面は天狗である。天の八衢（やちまた）にいて邪眼をもって神々を恐れさせたが、瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）の天孫降臨の際に従神としてお供していた天鈿女命（あめのうづめのみこと）に制せられ、その道案内をしたといういわれから、猿田彦役の者が祭の際の神輿の先頭に立つこともある。旅行安全祈願のための神社として、この神が祀られる。 神楽奉納の最初に舞われるのは、周囲を祓い清める意味も含まれている。鳥兜をかぶり、右手に矛を持って舞ったのち、左手に矛を持ち替え右手に鈴を持って国開きの道案内をする様子を舞い踊る。	
第三座	春日（かすが）の舞	藤原鎌足を祀った春日神社は藤原氏の氏神で、祖先を子孫が敬うという日本民族の信仰の源といえる。春日の舞はその象徴でもあり、手に持った日本刀で災難や悪運を断ち切り、平和な世の中にしてほしいという願いが込められている。	
第四座	翁（おきな）の舞	住吉（すみよし）の舞ともいわれる。住吉の神は 180 歳という長寿であることから、これにあやかり長生き願う舞である。右手に鈴、左手に榊を持って舞う。	

座	演目	概要	写真
第五座	八幡（やはた）の舞	八幡は応神天皇・神功皇后を祀る神社の名称で、武勇の神として古くから信仰の対象とされている。舞は神功皇后の三韓征伐を讃えたもので、左手に弓、右手に矢を持ち勇壮に舞われる。「放つ矢に はずれざりけり 梓弓 八幡の神の 使いなりけり」と唱えたのち、鬼門といわれる北東（表鬼門）と南西（裏鬼門）の方角に一本ずつ矢を放つことで、邪悪なものを祓い清める意味を持つ舞である。	
第六座	宇豆女（うづめ）の舞	宇豆女は、天鈿女命（あめのうづめのみこと）のことであり、芸能の神でもある。『古事記』によると、天照皇大神は弟の須佐之男命の余りの暴虐に立腹し、天の岩戸に籠もってしまう。太陽の神が姿を隠してしまったため、天地は暗闇となり、悪いことばかりが起こるようになった。そこで岩戸の前に大勢の神が集まり、大神に出てきていただくために話し合った結果、天鈿女命が選ばれ舞を舞うことになった。 巫女装束（白の上衣に緋袴）の舞い手が、左手には扇子、右手には五色の絹布を付けた鈴を持ち舞い踊る。鈴には世の中を明るくするという意味が込められている。	
第七座	手力男（たぢからお）の舞	外の様子を不思議に思った天照皇大神が、岩戸を少し開けて覗いたときに、岩戸を全開し、大神の手を取り外へ連れ出したのが力自慢の手力男命である。 岩戸が開いたのちは世の中が明るくなったことを示す鈴を持ち、驚きの表情で舞う。以前は本物の平たい石でできた岩戸を用いていたが、現在は木の板を黒く塗ったものを用い、舞い手はさも重たそうに持ってみせる。	
第八座	大神（おおかみ）の舞	天照皇大神は、天地の守護神として八百万（やおよろず）の神々の上に立ち、また人々の信仰の中心でもある。左手には鏡を添えた榊を、右手には五色の絹布の付いた鈴を持って、再び姿を現した様子を優美に舞う。鏡は太陽を表している。	

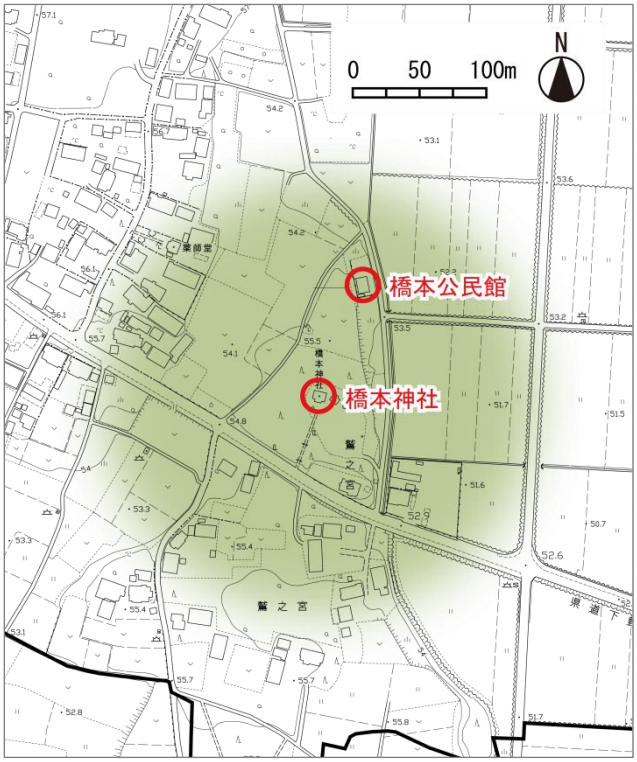
座	演目	概要	写真
第九座	恵比寿（えびす）の舞	恵比須は、漁業・商業・農業の守り神である七福神のひとりとして広く知られている。始めは単独で舞うが、後に道化役のヒョットコ3人を連れて、風折烏帽子をかぶり右手に扇、左手に釣り竿を持って登場する。4人が観客の頭上に餅や菓子等の餌を付けた釣り糸を下げると、観客は用意しておいた金銭を包んだ手びねりを餌と交換に釣り糸に付け、神のご利益に預かる。 舞では、やっとヒョットコが亀を釣り上げるが、不本意なものであったため気を落としていると、恵比須は亀に頬ずりして、「鶴は千年、亀は万年」とめでたいものだと言って聞かせる。間もなく恵比須も鯛を釣り上げ、4人は喜び勇んで退場する。 この舞には、「人に与えることで、巡りめぐって最後には自分に返ってくる」という、恵比須ならではの思想が表されている。	
第十座	引射（ひきしゃ）の舞	鹿島大神・香取大神の舞ともいう。両神とも日本の代表的な神であり、武神として信仰されている。 2 人の舞手が弓矢を持ち「桑の弓　蓬の矢にて　射るときは　向こう矢先に　悪魔たまらん」と唱えたのち、それぞれが1本ずつ鬼門の方角に放つ。位置を交代して再び「梓弓　なおも雲居に　昇るかな　弓張りつきの　ゆるにまかせて」と唱え、1本ずつ放つ。こうして威嚇することで邪悪なものの侵入を断ち、精神のよみがえりをはかる舞である。	
第十一座	白狐（びゃっこ）の舞	稲荷の舞ともいう。稲荷神社は五穀を司る神を祀る。境内に狐の狛犬があることからもわかるように、狐はこの稲荷神の使者とされ、神としても信仰の対象とされている。 狐は鍬を手に登場し、鍬切（畝たて）を行い、種をまく。そこに道化のヒョットコが3人、ツブテコシ（土掛小道具）を手に登場し、まかれた種に土をかける。白狐とヒョットコは、生育を願いながらこうした作業の様子を舞う。 太鼓は子供、笛は大人が演奏し、踊り手も子供による。	

座	演目	概要	写真
第十二座	大黒（だいこく）の舞	七福神の一人である大黒様は、江戸時代に大国主命と習合して成立した神である。大国主命は国造りや農耕の神であるが、大黒様も大地を表す小槌を手に持ち、米俵の上に鎮座する。小槌を振ると出る宝物は、大地からの収穫物を指している。 大黒様が槌を手にして耕すことで、作物であるお宝（お田から）としての米や餅を得る様子を舞踊る。始めは小槌のみで舞い、後に右手に鈴、左手に小槌を持って舞う。	
第十三座	須佐之男（すさのお）の舞	須佐之男命は、宇豆女の舞の所で触れたように、荒々しく力強い神の代表とされ、「荒（すさ）」の字を当てることもある。鬼神は悪事の一切を司る神である。かつては、梅雨に入り高温多湿の時期になると、疫病などが流行した。そこでこの最強の神を祀り、集落内を神輿をかついで一軒ずつまわることで祓い清めてから、お盆様を迎えたという。 舞では、まず鬼神が登場し我が物顔で舞踊る。そこへ須佐之男命が登場し、手にした剣を鬼神に向け「須佐之男の　あらん限りは　厄神の　草なぎ払うはへぎりの剣」と唱え、見事に退治する。最後は勇壮な須佐之男の舞で終わる。	

②　橋本神社太々神楽保存会

橋本神社の太々神楽は、吉田流太々神楽であり、橋本神社太々神楽保存会が継承している。古くから神楽を受け継いできた先人への尊敬の念を持つ当時の舞手によって昭和 40 年代後半に保存会が結成され、後世への神楽文化の継承を目的に昭和 60 年代初めから地元の小学生に対して育成を始めたといわれている。

現在、橋本の大人 14 名（男：13、女：1、半数が 60 代で最年少者は 30 代）、子供 13 名（男：4、女：9）の計 27 名が所属しており、希望者は誰でも入会することができる。舞や太鼓等の演奏は口伝によって子供たちに伝えられている。



橋本神社の太々神楽にみる歴史的風致の分布

③　出張神楽

橋本神社太々神楽保存会は、神楽の継承と育成のために、天平の花まつりや文化祭、エコライフまつり等、市で行われるイベントでも神楽を披露している。

橋本神社の南に位置する鷲宮神社では、７月末に行われる輪くぐり祭で、神事の後に神社内にステージを設け、地元の子供達による太々神楽が奉納される。平成 30 年（2018）の輪くぐり祭では白狐の舞と恵比寿の舞が演じられた。

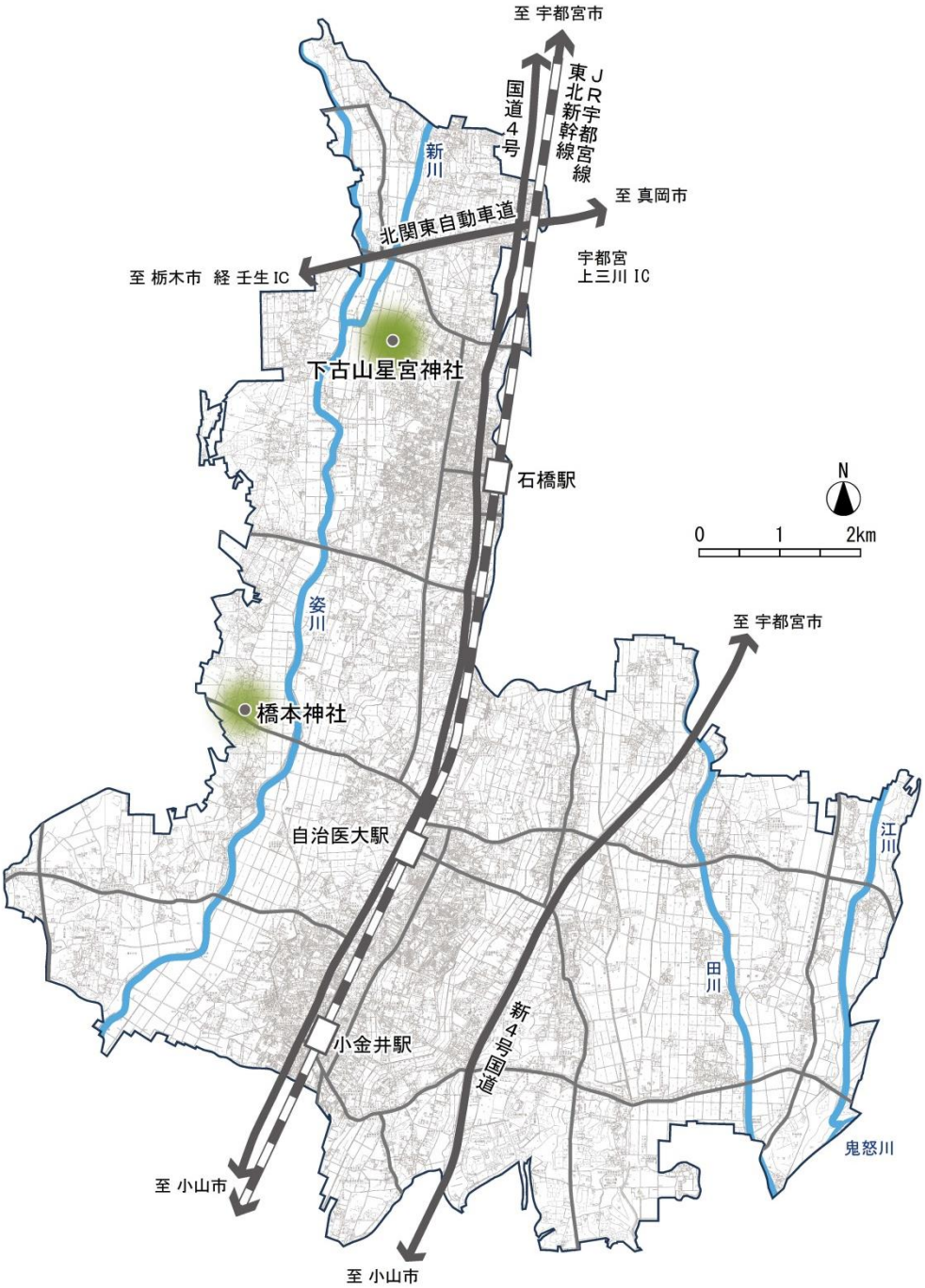
神楽の練習風景

橋本神社太々神楽保存会による出張神楽

(2) まとめ

下古山星宮神社と橋本神社は、現在もそれぞれの氏子地域を中心に信仰されており、江戸時代あるいは明治時代からの太々神楽は、保存会を始めとする地域の人々によって支えられて現代まで受け継がれてきた。

太々神楽が奉納される祭礼の当日には、神社の境内に太鼓や笛が奏でる音が鳴り響き、神聖な雰囲気のなか面をつけた舞手が舞う様は歴史的な風情を感じさせる。神事が執り行われる本殿や神楽殿を始めとする建造物とその中で奉納される太々神楽、これらを支えてきた地域の人々が一体となって歴史的風致をつくりだしている。



太々神楽にみる歴史的風致

コラム

下古山のかかし祭り

下古山星宮神社では、８月下旬に実施されている風祭の日に「古山のかかし祭」を開催している。

これは、地域の氏子が中心となって地域を盛り上げるために始められた行事の一つである。

神社の旧参道に地元小学校や市民団体が制作したユニークなかかしが立ち並び、かかしコンテストなどが催されている。なお、このかかしが立ち並ぶ神社周辺の田園風景が栃木県「とちぎのふるさと田園風景百選」に認定されている。